

復職に到るまでの取り組み

自立生活訓練センター 作業療法士 折出 優

1. はじめに

当センターは、身体・社会・精神および職業的自立のための訓練を受ける施設で、医学的リハビリテーションを経てきた方が、社会復帰を目標に、必要な適性機能の回復を図ることを目的とする。

作業療法士は、自立生活のために必要な自己管理能力の獲得や、社会参加の場を見つけるための援助、社会参加に必要な能力を図り、グループワークや個別訓練等、各利用者に応じた支援を行っている。

今回、体験を語っていただく I 氏の復職に到るまでの経過と、課内での支援内容を中心に報告する。

2. 事例紹介

現病歴：X年6月、歩行中、自動車に接触し、A病院へ救急搬送される。外傷性脳挫傷・びまん性軸索損傷の診断にて急性期治療後、左片麻痺・高次脳機能障害が残存する。8月リハビリ目的でB病院へ入院し、独歩・ADL自立となった。12月職場復帰目的で、訓練課入所となる。

主訴：「教壇にもう一度立ちたい。」と復職に対する強い思いを抱いていた。

入所時の課題点(高次脳機能障害の症状)

- ① 先の見通しに対する段取り・計画に時間を要す。
- ② 集団内で、他者に合わせられず、感情のコントロールが難しい。
- ③ 記憶力低下により、人の名前や約束ごとを忘れる
- ④ 注意力低下により、自動車運転の乗車が難しい。
- ⑤ 職場の理解が不十分で、受け入れ体制が整っていない。

3. 訓練内容と経過

| 日付 | X年12月 | | | 4月 | | | | | | 12月 | | | 3月 |
|-----------|-------|--|--|----|--|--|--|--|--|-----|--|--|----|
| 身体機能ex. | | | | | | | | | | | | | |
| パソコンex. | | | | | | | | | | | | | |
| 注意機能集団ex. | | | | | | | | | | | | | |
| 遂行機能集団ex. | | | | | | | | | | | | | |
| 模擬授業 | | | | | | | | | | | | | |

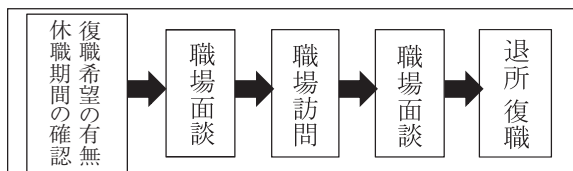
【遂行機能集団訓練】

週1回・計10回を1クールとし、利用者6名と共に計画を立てて遂行していくものである。初期は、他の利用者と意見を合わさず自身の考えのみで言動し、また感情が高ぶる様子もみられた。毎回、振り返りと次の目標を共有しながら、改善していけるようにした。2クール目には、他利用者の意見に傾聴しながら、段取りを立てていけるようになった。

【模擬授業】

週1回40分間、模擬授業を行った。台本のない状態でも、滞りなく授業を進められた。生徒役を増やしても、各生徒役の発言に応じた対応が行えていた。

4. 復職までの支援の流れ(訓練課内)



- ・左図は課内の一般的な復職までの支援の流れである。
- ・I氏は職場面談を3回以上行い、復帰までの検討を重ねた。

5. まとめ

I氏は復職を目標に、訓練と職場面談を重ね、教師に戻る事ができた。それは、I氏が自身の課題に向き合いながら訓練を継続し、また、支援者は復帰先の理解が得られるように、チームでサポートしたことで、復職につながったと思われる。

課内では、復職を目指す高次脳機能障害者は多い。各利用者により、症状が異なり、また復帰先の環境も異なる。支援者は、各個人の病前のストーリーを把握し、復帰後もその人らしく過ごせられるように、チームで検討していくことが大切であると感じた。